

# 広島大学学術情報リポジトリ

## Hiroshima University Institutional Repository

Title	短期の自然体験活動を通じた児童の心理的社会的能力の変容に関する一考察
Author(s)	米沢, 崇; 北山, 佳恵; 馬越, 夕椰; 小川, 楓果; 石橋, 将平
Citation	学習開発学研究, 16 : 33 - 40
Issue Date	2024-03-30
DOI	
Self DOI	<a href="https://doi.org/10.15027/55097">10.15027/55097</a>
URL	<a href="https://doi.org/10.15027/55097">https://doi.org/10.15027/55097</a>
Right	Copyright (c) 2024 広島大学大学院人間社会科学研究科学習開発学領域
Relation	



# 短期の自然体験活動を通じた児童の 心理的社会的能力の変容に関する一考察

米沢 崇・北山 佳恵<sup>1</sup>・馬越 夕椰<sup>1</sup>・小川 楓果<sup>2</sup>・石橋 将平<sup>2</sup>  
(2024年1月25日 受理)

## A Study of the Changes in Children's Psychological and Social Ability Through Short-term Nature Activities

Takashi YONEZAWA, Yoshie KITAYAMA<sup>1</sup>, Yuya UMAKOSHI<sup>1</sup>, Fuka OGAWA<sup>2</sup> and Shohei ISHIBASHI<sup>2</sup>

**Abstract:** This study aimed to clarify 1) the changes in the psychological and social ability of participants through short-term nature activities, and 2) the relationship between psychological and social ability and the contents of experiences in nature activities. A questionnaire was administered to 74 elementary students who participated in short-term nature activities. The major findings were: 1) Psychological and social ability improved, with partial exceptions, through short-term nature activities, and 2) The contents of the experiences such as challenges, achievements, and cooperation with other children showed a positive association with the changes in psychological and social ability. These results indicate that short-term nature activities for children have a positive effect on the improvement of *Ikiru Chikara* (Zest for Living).

**Key words:** Short-term Nature Activity, Outdoor Education, *Ikiru Chikara* (Zest for Living),  
Psychological and Social Ability

キーワード: 短期の自然体験活動, 野外教育, 生きる力, 心理的社会的能力

### 問題と目的

我が国の教育においては、長年にわたって子供たちの「生きる力」の育成を目指してきた。中央教育審議会（1996）の第一次答申は、変化の激しい社会の中で子供たちに必要な資質・能力として「生きる力」を提唱した。さらに、「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総則編」では、「生きる力」をより具体化し、教育課程全体を通して育成を目指す資質能力を「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の3つの柱に整理している。

このように「生きる力」の育成が重要視される中で、「生きる力」の育成を促す場としての野外教育の意義が再検討されている（文部科学省、1996；文部科学省、2017）。野外教育とは「自然の中で組織的、計画的に一定の教育目標をもって行われる自然体験活動の総称」であり、自然体験活動は「自然の中で、自然を活用して行われる各種活動であり、具体的には、キャンプ、ハイキング、スキー、カヌーといった野外活動、動植物や星の観察といった自然・環境学習活動、自然物を使った工作や自然の中での音楽会といった文化・芸術活動などを含んだ総合的な活動」である（文部科学省、1996）。なお、本研究では、「野外教育」「自然体験活動」「キャンプ」は、自然の中で組織的・計画的に一定の教育目標をもって行われていると

<sup>1</sup> 広島大学大学院人間社会科学研究科

<sup>2</sup> 広島大学教育学部

いう点で同義と捉えている。また、中央教育審議会（1998）では、長期の自然体験プログラムの提供や「長期自然体験村」の設置など、長期の自然体験活動の振興が目指され、地域社会全体で子供たちの「生きる力」を育む取組が提唱された。以上から、自然体験活動を通じた「生きる力」の育成が重要視されてきたことが指摘できる。

そのような中、先行研究では自然体験活動の効果検証のために「生きる力」の測定指標が開発されてきた。例えば、橘・平野（2001）によると、「生きる力」は、「心理的社会的能力」「徳育的能力」「身体的能力」の3つの上位指標から成り、「心理的エネルギー」「自己規制」「日常的行動力」をはじめとする7つの中位指標、「非依存」「自然への関心」「行動」をはじめとする14の下位指標で構成される<sup>1)</sup>。この指標をもとに、橘ほか（2003）では「生きる力」を測定する「IKR 評定用紙」を開発した。この評定用紙を用いて調査を実施した結果、自然体験活動の前後で14の下位尺度全てで得点が有意に増加し、長期キャンプへの参加が参加者の「生きる力」の向上に効果的であると明らかになった。さらに、徳育的能力よりも心理的社会的能力への効果がより大きいことも示された。また、簡便な調査の実施を目指して、独立行政法人国立青少年教育振興機構（以下、国立青少年教育振興機構）が「IKR 評定用紙」の70項目を28項目に絞り込んだ簡易版を作成した。

「IKR 評定用紙」は広く普及し、それを用いた先行研究も数多く見られる。遠藤ほか（2006）は、4泊5日のキャンプ前後での小学生の「生きる力」の変容を検証した。その結果、キャンプ経験が参加児童の「生きる力」の全体にわたって好ましい影響を与え、心理的社会的能力や徳育的能力の向上により大きな影響を及ぼすことを明らかにした。また、矢野（2007）は、5泊6日の臨海学校が小学生の「生きる力」に及ぼす効果について検証し、上位指標すべてで得点が有意に向上したことを明らかにした。また、14の下位指標の変容からは、臨海プログラムの「生きる力」への効果は、心理的社会的能力や身体的能力の側面に大きく働いたことが明らかになった。瀧（2007）は、7泊8日のキャンプに参加した小学4年生から6年生の児童を対象として、「生きる力」の変化を測定し、キャンプ経験が「生きる力」全体の向上に影響を及ぼし、特に心理的社会的能力の向上が大きいことを明らかにした。

これらの「IKR 評定用紙」を用いて「生きる力」の変容に着目した先行研究から、自然体験活動による徳育的能力や身体的能力の育成への効果はキャンプの内容や研究によって結果が分かれている一方で、心理的社会的能力の育成には概ね有効であることが伺える（山川，2019）。では、自然体験活動を通じた心理的社会的能力の変容に何が関連しているのだろうか。橘ほか（2003）は、冒険的克服のプログラムや仲間作りを強調するプログラムを特に重視して実施されたキャンプでは心理的社会的能力の向上が大きかったことを示した。

以上を踏まえると、心理的社会的能力の変容と関連する要素として、自然体験活動における体験の内容が挙げられる。具体的には、心理的社会的能力の向上を図る活動を、参加児童が体験することが重要であると考えられる。しかし、自然体験活動に参加した児童を対象に心理的社会的能力と自然体験活動における体験との関連について検討した研究は、管見の限りではあるが見当たらない。心理的社会的能力の向上に関わる直接の要因については、まだ明らかになっていないものの、心理的社会的能力の向上を促す取組は、変化の激しい現代社会において特に重要である。中央教育審議会（2021）によると、社会の在り方が劇的に変わる「Society5.0時代」や、新型コロナウイルスの感染拡大など先行不透明な「予測困難な時代」が到来している。その中で、一人一人の児童生徒が自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値ある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手になることが必要であることが示されており、その資質・能力の1つに心理的社会的能力が挙げられる。以上より、本研究において、自然体験活動を通じた心理的社会的能力の変容や、心理的社会的能力の変容と自然体験活動における体験の関連について検討していくことは有用であると考えられる。

ところで、先述した先行研究から、自然体験活動を通じた心理的社会的能力の向上が大きいことが明らかになっている一方、それが長期の自然体験活動における結果が多いことも事実である。文部科学省「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別活動編」では、宿泊を伴う行事を実施する場合は、一定期間（1週間（5日間）程度）にわたって行うことが望まれると示されている。しかし、国立青少年教育振興機構（2019）の全国調査によると、小学校の集団宿泊活動の実施日数は「1泊2日」（59.6%）や「2泊3日」（33.1%）が主であり、文部科学省が小学校に推奨している「一定期間」に合致する「4泊以上」実施している小学校の割合は約4%と極めて低い。また、短期の自然体験活動における「生きる力」の変容に着目した先行研究を概観すると、中川ほか（2005）は、14泊15日の長期キャンプの方が2泊3日の短期キャンプに比べ、心

理的社会的能力における向上が大きかったことや短期キャンプでは上位指標の向上は認められなかったことを示した。一方で、神田・佐藤（2012）は、2泊3日のキャンプ前後で、心理的社会的能力のみならず、「生きる力」全体が有意に向上していたことを報告している。すなわち、「生きる力」や心理的社会的能力の向上に対する実施期間の影響は明確になっておらず、更なる知見の蓄積が必要である。これらを踏まえると、小学校で最も実施されている集団宿泊活動の実施日数（1泊2日）と同様の実施日数で開催される短期の自然体験活動に着目し、現代社会において求められる「生きる力」、特に心理的社会的能力の変容及び自然体験活動における体験との関連を検討することは意義深いと考えられる。

そこで本研究では、短期の自然体験活動を通じた児童の心理的社会的能力の変容を明らかにするとともに、心理的社会的能力と自然体験活動における体験の内容との関連を明らかにすることを目的とする。そこから得られた結果をもとに、「生きる力」の育成に資する自然体験活動を実践するための基礎的な知見を得たい。

## 方法

### 1. 調査協力者及び倫理的配慮

2022年12月に青少年教育施設において1泊2日で実施された2つの短期の自然体験活動（事業）を調査対象とした。具体的には、事業Aに参加した小学生42名及び、事業Bに参加した小学生32名を対象に、各事業の開始前と終了時に質問紙調査を実施した。回収した質問紙のうち回答に不備の無かった70名を有効回答とした。

倫理的配慮として、調査は無記名で実施した。前後のデータの対応付けのため、個人番号の記入を求めたが、個人の回答の特定が目的ではないことを説明した。また、調査への協力は任意であり、集めたデータは成果報告を含む研究活動以外では使用しないことを事前に送付した。依頼書に記入し、保護者の同意を得た上でアンケート調査を行った。なお、倫理審査は第一著者の所属する大学の研究倫理審査委員会にて承認を得た（承認番号：HR-ES-000527）。

### 2. 短期の自然体験活動（事業）の概要

事業Aは、「協働的な自然体験の中で試行錯誤を繰り返すことによって互いを認め合い、自ら考え学びを生かすことができる態度を養う」ことを目的として、小学4～6年生を対象に開催された。1日目は、アイスブレイク、野外炊事、2日目は、清掃、ウォークラリーを主に行い、2日ともその日の最後には振り返りを行った。

事業Bは、「自然体験活動を通して、積極性・協調性を身に付けさせると共に最後までやり遂げる力を育む」ことを目的として、小学6年生を対象に開催された。1日目は、アイスブレイク、野外炊事、ナイトウォーク、2日目は、早朝登山、野外炊事を主に行い、事業A同様、両日ともその日の最後には振り返りを行った。

なお、表1にそれぞれの事業のプログラムのタイムスケジュールを示す。これら2つの事業は、自然の中で組織的かつ計画的に一定の教育目標をもって行われている点や、1泊2日の短期間で行われている点で、心理的社会的能力の変容について検討する上で、調査対象として適切であると判断した。

表1 各事業のプログラムのタイムスケジュール

事業A										
【1日目】										
		10:00	11:00	12:00	13:00	15:25	19:25	20:00	21:30	
		受付	開講式 アイスブレイク	昼食	カブラ	野外炊事	振り返り	入浴	消灯	
【2日目】										
6:30	7:30	8:00	8:40	9:45	11:30	12:15	13:00	14:00		
起床	朝の集い	朝食	清掃	退所点検	ウォークラリー	振り返り	昼食	表彰式 閉講式	解散	
事業B										
【1日目】										
		9:30	10:00	11:00	14:00	18:00	20:00	21:00		
		受付	開会式 オリエン テーショ	海へ (昼食・弁当)	野外炊事(カレー)	ナイトウォーク	入浴	就寝		
【2日目】										
6:00	6:30	8:00	9:00	9:30	13:30	14:00	14:30			
起床	早朝登山	朝食	退所点検	野外炊事(すきやき)	振り返り	閉会式	解散			

### 3. 調査項目

#### (1) 心理的社会的能力に関する項目 (IKR 評定用紙 (簡易版))

橘ほか (2003) をもとに国立青少年教育振興機構 (2010) が作成した IKR 評定用紙 (簡易版) (全 28 項目) を用いる。この尺度は、橘ほか (2003) の「IKR 評定用紙」を用いた遠藤ほか (2006)、矢野 (2007) や本研究と同様に簡易版を用いた神田・佐藤 (2012) でも採用されている。調査項目については神田・佐藤 (2012) を参照した。心理的社会的能力に関する 14 項目を使用し、事業の開始前と終了時に 6 件法 (「1. 全くあてはまらない」「2. あてはまらない」「3. あまりあてはまらない」「4. すこしあてはまる」「5. あてはまる」「6. とてもよくあてはまる」) で回答を求めた。

#### (2) 自然体験活動の内容に関する項目 (児童用組織キャンプ体験評価尺度)

心理的社会的能力の変容に関連する自然体験活動の内容について検討するために、西田ほか (2002) が作成した児童用組織キャンプ体験評価尺度 (全 20 項目) を用いる。この尺度は、「自然とのふれあい体験」「挑戦・達成体験」「他者協力体験」「自己開示体験」「自己注目体験」の 5 因子から構成されている。そのうち、「生きる力」の心理的社会的能力に関連すると思われる「挑戦・達成体験」「他者協力体験」「自己開示体験」を構成する項目の一部を用いた。具体的には、児童の回答の負担を考慮して、西田ほか (2002) において各因子で統計的に有意な差が確認され、かつ最も得点が向上した 1 項目を採用した。ただし、「挑戦・達成体験」に関しては挑戦体験と達成体験の内容に分けた項目を作成し、計 4 項目 (挑戦体験：これまでに行ったことのないことに挑戦したことがあった、達成体験：何かしらの目標を達成することが出来たことがあった、他者協力体験：グループ (班) の人と仲良く活動したことがあった、自己開示体験：自分が思っていることを友だちに伝えたことがあった) について事業の終了時に 4 件法 (「1. あてはまらない」「2. あまりあてはまらない」「3. 少しあてはまる」「4. よくあてはまる」) で回答を求めた。

### 4. 分析の方法

短期の自然体験活動を通じた心理的社会的能力の変容を検討するために、心理的社会的能力を構成する 7 つの因子それぞれの自然体験活動前後の下位尺度得点を対応のある  $t$  検定で比較する。また、自然体験活動における体験内容と心理的社会的能力との関連を検討するために、自然体験活動の内容に関する 4 つの項目を説明変数、心理的社会的能力を構成する各下位尺度の前後の得点差を目的変数とした重回帰分析を行う。分析にあたっては、IBM SPSS Statistics 28.0 を使用した。

## 結果

### 1. 尺度の構成

本研究では、橘ほか (2003) をもとに国立青少年教育振興機構 (2010) によって作成された IKR 評定用紙 (簡易版) の心理的社会的能力 (14 項目) の因子構造をそのまま採用した。クロンバックの  $\alpha$  係数を算出したところ、 $\alpha$  係数は .76-.72 であったことから各因子の内的一貫性を確認できた (表 2)。

表 2 心理的社会的能力 (前後の得点差) と自然体験活動内容の相関係数および記述統計量

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	<i>M</i>	<i>SD</i>	$\alpha$ 係数
1. 非依存	-	.33**	.31*	.10	.16	.33**	.25*	.17	.14	-.04	.16	.48	.77	0.76
2. 積極性		-	.56**	.40**	.29*	.48**	.46**	.24*	.13	.20	.17	.47	.95	0.72
3. 明朗性			-	.32**	.42**	.32**	.35**	.17	.31**	.20	.06	.25	.97	0.73
4. 交友・協調				-	.25*	.19	.41**	-.06	.19	.06	.20	.25	.83	0.75
5. 現実肯定					-	.06	.19	.11	.21	.24*	-.01	.12	.92	0.76
6. 視野・判断						-	.61**	.12	.21	.02	.14	.75	1.14	0.74
7. 適応行動							-	-.01	.28*	.10	.09	.48	1.04	0.73
8. 挑戦体験								-	.22	.44**	.28*	3.81	.46	
9. 達成体験									-	.42**	.41**	3.70	.60	
10. 他者協力体験										-	.16	3.89	.32	
11. 自己開示体験											-	3.66	.63	

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$ .

## 2. 心理的社会的能力の変容

「心理的社会的能力」の7つの下位尺度それぞれについて、自然体験活動前後の得点を対応のある  $t$  検定で比較した結果、「非依存」の得点 ( $t(69)=5.18, d=.62$ )、「積極性」の得点 ( $t(69)=4.15, d=.50$ )、「視野・判断」の得点 ( $t(69)=5.50, d=.66$ )、「適応行動」の得点 ( $t(69)=3.87, d=.46$ ) が  $p<.001$  の水準で有意に上昇していた。また、「明朗性」の得点 ( $t(69)=2.18, d=.26$ )、「交友・協調」の得点 ( $t(69)=2.55, d=.30$ ) が  $p<.05$  の水準で有意に上昇していた。一方で、「現実肯定」の得点 ( $t(69)=1.09, d=.13$ ) には統計的に有意な差が認められなかった (表3)。

表3 自然体験活動を通じた心理的社会的能力の変容

	Pre		Post		$t$ 値	$d$
	$M$	$SD$	$M$	$SD$		
非依存	4.68	1.02	5.16	1.01	5.18 ***	0.62
積極性	4.69	1.12	5.17	0.96	4.15 ***	0.50
明朗性	4.98	1.13	5.23	0.96	2.18 *	0.26
心理的社会的能力 交友・協調	4.81	1.02	5.07	0.96	2.55 *	0.30
現実肯定	4.84	1.13	4.96	1.17	1.09	0.13
視野・判断	4.12	1.31	4.87	1.05	5.50 ***	0.66
適応行動	4.69	1.00	5.17	1.04	3.87 ***	0.46

\*  $p<.05$ , \*\*  $p<.01$ , \*\*\*  $p<.001$ 。

## 3. 心理的社会的能力の変容と自然体験活動における体験との関連

各変数間の相関については、ピアソンの積率相関係数を算出した (表2)。つづいて、自然体験活動の内容である「挑戦体験」「達成体験」「他者協力体験」「自己開示体験」を説明変数、心理的社会的能力の下位尺度である「非依存」「積極性」「明朗性」「交友・協調」「現実肯定」「視野・判断」「適応行動」の自然体験活動前後の得点差を目的変数とした重回帰分析 (ステップワイズ法) を行った (表4)。重回帰分析の結果、「挑戦体験」が「積極性」 ( $\beta=.24, p<.05$ ) に正の標準偏回帰係数を示した。さらに、「達成体験」が「明朗性」 ( $\beta=.31, p<.01$ ) と「適応行動」 ( $\beta=.28, p<.05$ ) にそれぞれ正の標準偏回帰係数を示した。また、「他者協力体験」が「現実肯定」 ( $\beta=.24, p<.05$ ) に正の標準偏回帰係数を示した。一方で、「自己開示体験」については、心理的社会的能力のいずれにも統計的に有意な関連は見られなかった。以上の結果から、「積極性」「明朗性」「適応行動」「現実肯定」といった一部の心理的社会的能力の変容には、「挑戦体験」「達成体験」「他者協力体験」といった自然体験活動における体験内容がポジティブに関連していることが明らかになった。

表4 自然体験活動の内容を説明変数、心理的社会的能力の前後の得点差を目的変数とした重回帰分析の結果

	非依存	積極性	明朗性	交友・協調	現実肯定	視野・判断	適応行動
	$\beta$	$\beta$	$\beta$	$\beta$	$\beta$	$\beta$	$\beta$
挑戦体験	-	.24*	-	-	-	-	-
達成体験	-	-	.31**	-	-	-	.28*
他者協力体験	-	-	-	-	.24*	-	-
自己開示体験	-	-	-	-	-	-	-
adj $R^2$	-	.04	.08	-	.05	-	.06

\*  $p<.05$ , \*\*  $p<.01$ , \*\*\*  $p<.001$ 。

標準偏回帰係数 ( $\beta$ ) は、有意な結果のみ記載している。

## 考察

### 1. 短期の自然体験活動を通じた心理的社会的能力の変容

ここでは、短期の自然体験活動を通じた心理的社会的能力の変容について得られた結果のうち、統計的に有意な差が認められ、かつ効果量も示された結果に着目して考察する。自然体験活動前後の心理的社会的能力の得点を  $t$  検定で比較した結

果、自然体験活動後に「非依存」「積極性」「視野・判断」「適応行動」の得点が統計的に有意に向上していた。これらの結果は、今回調査対象とした両事業のプログラムにおいて野外炊事の体験が含まれていたことが影響していると推測される。両事業の野外炊事において、児童は失敗を恐れず薪割りに挑戦する姿勢を見せていたり、自分から進んで食材を切ることや火おこしをすることが求められたりしていた。また、野外炊事の終了時刻が決められたなかで、班で役割を分担しながら効率よく計画的に調理しようとしていたり、薪割りや火おこし、包丁の取り扱いなどにおける注意事項を指導者からしっかり聞く力が求められたりしていた。橋ほか(2003)によれば、食事の提供が「ほとんど宿舎施設・スタッフ提供」だったキャンプと「ほとんど自炊」だったキャンプを比較し、自炊の方が心理的社会的能力のすべての項目において施設やスタッフが提供するより変化が大きかったことを報告している。この橋らの結果は、本研究で「現実肯定」に統計的に有意な差が見られなかったことを除いては概ね一致している。これらのことから、宿舎施設が提供する食事ではなく、児童自ら行う野外炊事の体験を通して、「非依存」「積極性」といった心理的エネルギー<sup>1)</sup>や「視野・判断」「適応行動」といった判断力が向上していったと思われる。また、両事業の目的に「試行錯誤を繰り返す」ことや「自ら考え学びを生かす」こと、「積極性・協調性を身に付ける」ことや「最後までやり遂げる力を育む」ことが掲げられており、本研究で対象とした短期の自然体験活動全体では、非日常的なかで困難に挑戦したり自ら積極的に行動したりすることが常に求められていたと思われる。先行研究では、「非依存」や「積極性」が高まることにより、困難に挑戦したり自分から積極的に活動したりしようとする力が身につくことが期待され(矢野, 2007)、キャンプに積極的に参加したり、自分の判断で行動したりすることなどが生きる力を向上させる要因である(遠藤ほか, 2006)ことが報告されており、本研究で対象とした短期の自然体験活動全体を通じて心理的エネルギーや判断力が変容したと考えられる。

この他に、「明朗性」「交友・協調」「現実肯定」といった社会的スキルについては、「現実肯定」を除いて得点が有意に向上していることが確認できた。中川(2005)でも、短期キャンプ前後で「明朗性」「交友・協調」のどちらも向上することが報告されている。大学生を対象とした研究ではあるが、キャンプ実習におけるオリエンテーリングが参加学生の自己概念の変容に及ぼす影響を検証した福田・五林(1987)は、オリエンテーリングが参加学生の社交性や外向性の向上に効果をもたらしたことを報告している。これらのことを踏まえると、オリエンテーリング等、社会的スキルの向上を目指した活動を自然体験活動に取り入れることによって、短期間の実施であっても、社会的スキルが向上する可能性があると考えられる。

## 2. 心理的社会的能力の変容と自然体験活動における体験内容との関連

心理的社会的能力の変容と自然体験活動における体験内容との関連について、自由度調整済み決定係数の値が低いこと(表4)に留意しつつ考察していく。まず、「挑戦体験」が活動前後の「積極性」の得点差にポジティブに関連していることが明らかになった。自然体験活動のなかで物事に新しく挑戦するという体験が、自分から進んで取り組むことや前向きに物事を考える力を向上させると考えられる。本研究で対象とした短期の自然体験活動において挑戦体験ができたプログラムとしては、例えば、日常では体験することのない薪割りや火おこしに挑戦した野外炊事や、スポットごとのミッションに挑戦しながら進んでいくウォークラリーがあげられる。このような挑戦体験が児童の「積極性」を向上させたと考えられる。

つづいて、「達成体験」が活動前後の「明朗性」と「適応行動」の得点差にポジティブに関連していることがわかった。物事を達成するという体験が、その児童自身の明るさにつながったり、その場にふさわしい行動をとったりできるようにすると推測できる。今回の短期の自然体験活動においては早朝登山、野外炊事、ウォークラリー、ナイトウォークが達成体験を実感できたプログラムであったと思われる。特に、早朝登山における登頂したときの達成感や、野外炊事において試行錯誤を繰り返しながら調理をし、料理が完成したときの達成感が大きいものだと伺える。ウォークラリーでは、スポットのミッションをクリアするごとに達成感を実感できるかもしれない。このような達成体験を繰り返すなかで、児童の明るさを引き出し、前向きな気持ちにさせていたのではないかと考えられる。また、それらの達成に至る過程では危険を伴う場面もある。例えば、本研究で対象とした短期の自然体験活動において、早朝登山では日の出前で暗く、足場の悪いルートを登っていきたくないといけな場面、野外炊事では鉋や火の取り扱いに気を付けなければいけない場面がある。そのため、その場にふさわしい行動が求められたことによって「適応行動」においても向上が見られたのではないかと考えられる。

さらに、「他者協力体験」が活動前後の「現実肯定」の得点差にポジティブに関連していることも明らかになった。他者と

協力する体験が、他者や自分自身を肯定的に捉えられるようにするといえる。他者協力体験は、どの活動においても班単位での行動が求められていたため、両事業のプログラムにおいても体験できたと推測される。そのなかで、お互いを認め合い、他者に対してのみならず自分に対する肯定的な感情を養うことができたのではないかと推測する。伊勢ほか（2017）は、子どもの「生きる力」と遊び方の関連を検討し、1人で遊んでいる子どもは複数人で遊んでいる子どもよりも「生きる力」が低く、複数人で遊ぶ方が「現実肯定」の得点が高いことを明らかにしている。このことから、今回の短期の自然体験活動において児童が他者との関わり、お互いに協力することで現実肯定が変容したと推察される。

最後に、「自己開示体験」については心理的社会的能力の変容に統計的に有意な関連は認められなかった。推測の域を出ないが、自己開示の場としては、班での協力が求められる各プログラムや振り返りはあったが、1泊2日の短期間であったこともあり、心理的社会的能力の変容との関連は確認できなかったと思われる。

## まとめ

本研究の目的は、短期の自然体験活動を通じた児童の心理的社会的能力の変容と、心理的社会的能力と自然体験活動における体験の内容との関連を明らかにすることであった。分析の結果、短期の自然体験活動を通じて一部を除いて児童の心理的社会的能力は向上していること、「挑戦体験」「達成体験」「他者協力体験」といった体験内容が「積極性」などの心理的社会的能力の変容に肯定的な関連を示していることが明らかになった。これらの知見を踏まえると、短期の自然体験活動のプログラムでも、挑戦要素、達成要素、他者協力の要素を含めた体験活動を取り入れることで、短期間でも児童の心理的社会的能力を育成する可能性が示唆される。本研究は、これからの短期の自然体験活動の改善・充実のための基礎的な知見を提供したと思われる。

最後に、本研究の限界や課題について言及しておく。1点目に、自然体験活動の開始時と終了時の2時点での心理的社会的能力の変容しか検討できていない。また、対象群として短期の自然体験活動に参加していない児童や、長期の自然体験活動に参加した児童との比較検討を行えていないことがあげられる。今後は、終了から一定の期間をおいたフォローアップ調査や対象群との比較検討を行い、短期の自然体験活動を通じた児童の心理的社会的能力の変容を精緻にする必要がある。2点目に、心理的社会的能力と自然体験活動における体験の内容との関連の検討にあたっては、自由度調整済み決定係数の値が低かったことを踏まえると、挑戦体験、達成体験、他者協力体験、自己開示体験以外の体験や他の要因が心理的社会的能力の変容に関連している可能性がある。また、因果関係を含む変数間の詳細な関係を明らかにすることができなかった。そこで、複数時点の縦断的な調査を実施し、変数間の関連を多面的に検討していく必要がある。

## 注

- 1) 橋・平野（2001）によれば、心理的社会的能力は「心理的エネルギー」「社会的スキル」「判断力」という3つの中位指標で構成されており、「非依存」「積極性」は「心理的エネルギー」を、「明朗性」「交友・協調」「現実肯定」は「社会的スキル」を、「視野・判断」「適応行動」は「判断力」を構成する下位指標である。

## 謝辞

本研究にご協力いただきました青少年教育施設の職員の皆様、児童の皆様ならびに保護者の皆様に深くお礼申し上げます。

## 引用・参考文献

- 中央教育審議会（1996）21世紀を展望した我が国の在り方について（答申）。  
中央教育審議会（1998）新しい時代を拓く心を育てるために（答申）。



- 中央教育審議会（2021）「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）。
- 国立青少年教育振興機構（2010）事業評価に使える！「生きる力」の測定・分析ツール」。  
[http://www.niye.go.jp/kenkyu\\_houkoku/contents/detail/i/69/](http://www.niye.go.jp/kenkyu_houkoku/contents/detail/i/69/)（参照日 2023.11.8）
- 独立行政法人国立青少年教育振興機構（2019）小中学校の集団宿泊活動に関する全国調査報告書。  
<https://www.pref.hiroshima.lg.jp/uploaded/attachment/441459.pdf>（参照日 2023.11.8）
- 遠藤浩・築山泰典・竹内早代（2006）教育キャンプが参加児童の「生きる力」に及ぼす影響。日本野外教育学会第9回大会プログラム研究発表抄録集，pp. 24-25.
- 遠藤伸太郎・矢野康介・大石和男（2022）COVID-19 蔓延化における小学生の自然体験活動がメンタルヘルスに及ぼす影響：日常生活における運動時間を考慮した検討。体育学研究，**67**，pp. 657-672.
- 福田芳則・五林正隆（1987）オリエンテーリングが自己概念の変容におよぼす影響—O 体育大学キャンプ実習参加者を対象として—。体育大学紀要，大阪体育大学，**18**，pp. 121-130
- 伊勢慎・大久保淳子・櫻井国芳・池田孝博（2017）子どもの「生きる力」と学校内での遊び方の関連。福岡県立大学人間社会学部紀要，**25**（2），pp. 41-48.
- 神田亮・佐藤健（2012）児童の組織キャンプにおける MHPC 尺度と IKR 尺度の変容。別府大学短期大学部紀要，**31**，pp. 125-131.
- 文部科学省（1996）青少年の野外教育の充実について（報告）。
- 文部科学省（2017）小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 総則編。東洋館出版社。
- 文部科学省（2017）小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 特別活動編。東洋館出版社。
- 文部科学省（2017）特集 子供たちの未来を育む豊かな体験活動の充実。文部科学白書平成 28 年度。  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/hakusho/html/hpab201701/1389013\\_007.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpab201701/1389013_007.pdf)（参照日 2023.11.27）
- 中川もも・岡村泰斗・黒澤毅・荒木恵理・米山絵理（2005）長期・短期キャンプが小中学生の生きる力に及ぼす効果。野外教育研究，**8**（2），pp. 31-43.
- 西田順一・橋本公雄・柳敏晴（2002）児童用組織キャンプ体験評価尺度の作成および信頼性・妥当性の検討。野外教育研究，**6**（1），pp. 49-61.
- 橘直隆・平野吉直（2001）生きる力を構成する指標。野外教育研究，**4**（2），pp.11-16.
- 橘直隆・平野吉直・関根章文（2003）長期キャンプが小中学生の生きる力に及ぼす影響。野外教育研究，**6**（2），pp.1-12.
- 瀧直也・新島邦彦・平野吉直（2007）通学型キャンプが子どもの「生きる力」に及ぼす影響。国立オリンピック記念青少年総合センター研究機構，**7**，pp. 1-14.
- 山川晃（2019）自然体験活動が参加者の「生きる力」に与える影響—メタ分析による検討—。野外教育研究，**22**（2），pp. 17-30.
- 矢野正（2007）5泊6日の臨海学校が児童の生きる力に及ぼす効果。野外教育研究，**11**（1），pp. 51-64.